

『魔よけ物語』に反映された ネズビットの子ども時代と社会主義思想

白 須 康 子

はじめに

イギリス児童文学史において、1906年はタイム・ファンタジーというサブ・ジャンルに属す初めての作品が、偶然にも2人の作家によって同時に出版された年である。そのうちの1冊が本稿で取り上げるネズビット (E. Nesbit, 1858~1924) の *The Story of the Amulet* (『魔よけ物語』) で、彼女は親交があった H. G. ウェルズの未来小説 *The Time Machine* (1895) に触発されて、主人公の子どもたちを現実の世界から時空を超えた古代や未来の時代へ送り込み、積極的に歴史上の人物と関わせる型のタイム・ファンタジーを創作した。もう1人はキプリングで、彼はネズビットとは反対に妖精パックを仲介役として、現在の子どもの目の前に過去の住人たちを招待し、2人の子どもはあたかも舞台の上の歴史劇を観る観客という設定で *Puck of Pook's Hill* を発表した。タイム・ファンタジーはその後1930~50年代にかけてイギリスのお家芸ともいえるジャンルとして発展してゆく。

ネズビットは子ども時代の記憶を鮮明に保持し、それを克明に言葉で再現する才能に恵まれていた。彼女の作品に登場する子どもの特徴は、ありのままの自然体であることで、ネズビットはそのような子どもの登

場人物のうちの一人を語り手として、子どもの視点で物語を語ることをはじめた作家である。また、ネズビットは1884年にイギリスで結成された、社会主義を推進するフェビアン協会の創立メンバーであり、社会改革に関心を持ち、生涯熱心にこの協会の活動に携わった。『魔よけ物語』において、ネズビットは主人公の子どもたちを次々と異なる時代へタイム・トラベルさせるが、行く先々で彼らが遭遇する人々や状況を、子どもたちの現在である20世紀初頭のイギリスが直面している、さまざまな社会問題を浮かび上がらせるための舞台として利用し、作家自身の政治的メッセージやユートピア的未来像を提示している。

そこで、本稿ではネズビットの伝記や自伝的資料を基に、『魔よけ物語』に反映されている彼女の子ども時代と、この作品の中で表明されている社会主義者としてのネズビットの思想について考察する。

エブリディ・マジックと「魔法」シリーズ

子どものための近代小説はネズビットから始まったと言われるように、彼女は19世紀末のイギリスでF. AnsteyやMolesworth夫人といったヴィクトリア朝の児童文学作家たちが、まだ完全に払拭することができずにいた教訓性を排除することに成功し、『宝さがしの子どもたち』(*The Story of the Treasure Seekers*, 1899)において、子どもの語り手を導入した。このリアリズム作品である「バスタブル家」三部作と並行して書かれた、ファンタジーのシリーズにおいては「エブリディ・マジック」“everyday magic” (Eyre 45) という、子どもたちの日常生活の中に魔法的存在が侵入してくることによって、彼らが不思議な出来事に巻き込まれるという手法を確立した。この手法は20世紀に登場するイギリス人作家たちの作品、例えばP. L. トラヴァースの *Mary Poppins*

(1934)、メアリー・ノートンの *The Borrowers* (1952)、ベネロピー・ライヴリーの *The Ghost of Thomas Kempe* (1973)、さらにダイアナ・ウィン・ジョーンズの *The Ogre Downstairs* (1974) などに受け継がれている。

『魔よけ物語』は、『砂の妖精』(*Five Children and It*, 1902) に始まる「魔法」シリーズ三部作の最終巻で、第一作目の主人公、砂の妖精サミアドが再び登場する。しかし、『砂の妖精』は4人の兄弟姉妹、Cyril、Anthea、Robert、Jane の日常生活を舞台に、サミアドに叶えてもらう様々な子どもらしい願望と、そのコミカルな結末を中心に物語が展開するのに対し、『魔よけ物語』は子どもたちの生きる20世紀初頭という現在から歴史的にも文明的にも遥かに隔たった、時空を超越した異世界を舞台に展開する。シリーズ第2作目の『火の鳥と魔法のじゅうたん』(*The Phoenix and the Carpet*, 1904) には伝説上の霊長である不死鳥が登場し、4人の子どもたちが行きたい所へどこへでも連れて行ってくれる魔法の絨毯に乗って、イギリス国内のみならず外国へも空間移動する物語だが、『魔よけ物語』では再会したサミアドの忠告で手に入れた、アンティークの石の魔除けが作るアーチをくぐり抜けて、子どもたちは過去や未来の時代へと自在に時間移動を楽しむ。このように「魔法」シリーズでは、巻を追うごとに主人公の子どもたちが体験するマジックが質的に深化し、最終的に『魔よけ物語』において魔法とタイム・トラベルが結合する。一方で『魔よけ物語』はネズビットが後に執筆する、時の不思議を妖精物語の構造で探る二つの作品、*The House of Arden* (1908) と *Harding's Luck* (1909) と合わせて「タイム・ファンタジー」三部作となるシリーズの第一作目にもあたる。

ネズビットが残した遺産の真の後継者が現れるのは1930年代になってからである(Crouch 17)と言われるが、それ以降に登場した児童文

学作家は、多かれ少なかれネズビットの影響を受けていない作家はいないといっても過言ではない。ネズビットの作品を読んで育った世代の一人が C. S. ルイス (1898-1963) で、彼は *Surprised by Joy* (2002) の中で『魔よけ物語』を子ども時代に読んだ本の中でも特に印象に残っている本として取り上げ、その理由を “It first opened my eyes to antiquity, the dark backward and abysm of time.” (14) と述べている。1950 年代を代表する C. S. ルイスの〈ナルニア国物語〉シリーズには全編を通して、ネズビットの『魔よけ物語』からの影響が散見される。『魔よけ物語』は Dr Wallis Budge という大英博物館のエジプト学者に献呈されていることからわかるように、ネズビットはこの作品に関しては、古代史について多くの資料を丁寧にリサーチして書き、しかも各章ごとに専門家のチェックを受けているという点で、ネズビットの作品群の中でもユニークな作品である。

ネズビットの生い立ち

1858 年生まれのネズビットは人生の大半をヴィクトリア朝に生き、その時代が終焉を迎える頃、ちょうど彼女が 40 歳代に入ってから児童文学作品の執筆を始め、エドワード朝を代表する作家となった。思春期の頃からシェークスピアやクリスティーナ・ロセッティのような詩人になることを夢見て、大人向けの詩や小説も数多く発表した。ネズビットが偉大な業績を成し遂げたのは、“when the child in her spoke out directly to other children” (Eager 102) であった。子ども時代の記憶を鮮明に保ち、それを言葉で再現する才能に恵まれていたネズビットが、子どもの頃に祈ったことは “when I should be grown up I might never forget what I thought, felt, and suffered then.” (Moore 41) であり、

さらに *Wings and the Child* (1913) の中で、子どもを理解する唯一の方法は “to remember what you thought and felt and liked and hated when you yourself were a child. ... There is no other way” (20) と断言したネズビットは、大人になっても子ども心を忘れなかった人である。社交的で交友関係も広く、オカルト的な神秘主義から政治まで幅広い分野の事柄に興味を持っていたネズビットは、現実の人生において体験した、さまざまな出来事や関心事を何らかの形で作品の中に反映することが多い。そこで、『魔よけ物語』を語る上で鍵となるネズビットの子ども時代について、Moore (1967) と Briggs (2007) の伝記、および *The Girls Own Paper* に 1896 年から 10 月から翌 1897 年 9 月まで 12 回のシリーズで連載された、ネズビット自身による自伝的な子ども時代の回想録 “My School-Days” を参考文献としてひもとくことから始める。

ネズビットの父親は、優れた農業化学者として農業学校を経営していたが、彼女が 3 歳の時に亡くなり、このことが Daisy という愛称で呼ばれていたネズビットの幼年時代に大きな影を落とすことになる。ネズビットの母親は夫の死後、しばらく単独で学校の経営に携わったが、ネズビットが 7 歳の頃、病弱の娘メアリーの世話に専念するために、末っ子の Daisy を寄宿学校に入れた。しかし、この初めての学校でネズビットは年上の女の子によるいじめに苦しみ、たった一学期でこの学校を退学している。このいじめの体験は “My School-Days” の第 1 回目の話題として取り上げられているが、これには後日譚がある。ある日、母親が Daisy に自分をいじめた女の子が着ていたのと同じ Stuart Plaid と呼ばれる柄の布地で服を作ってくれるが、彼女はなぜその服が嫌いなのかという理由を母親に説明することが出来ず、結局いやいやながらその服を着なければならなくなる。そのことについてネズビットは次のようにこのエピソードを締めくくっている。

I have often wondered what it is that keeps children from telling their mothers these things — and even now I don't know. I only know I might have been saved many of these little-big troubles if I had only been able to explain. But I wasn't; and to this day my mother does not know how and why I hated that Stuart plaid frock. (*The Girls Own Annual* 28)

その後、ネズビットの母親はメアリーの健康のために娘3人を連れてヨーロッパ大陸の各地を、より良い療養地を求めて転々とする生活を送るようになる。その合間に Daisy は短期間で次々と別の学校への転校を余儀なくされ、しかも、どの学校も満足のいく教育の場ではなかったために、何度か脱走を試みるほど彼女は学校というものに対して極度の嫌悪感を抱くようになる。しかし、この間もネズビットは19世紀の児童文学作品を読み漁っている。

前述の通り “My School-Days” の連載は、ネズビットが通った最初の二つの寄宿学校で友達や先生にいじめられて惨めな思いをしたというエピソードで始まるが、それ以降はシリーズの題名にも関わらず学校に関する記述はほとんどない。そして、1896年12月から翌1897年2月にかけての3回は連続して、大人になっても色褪せることのない幼少時の恐怖体験の記憶が語られている。人一倍感受性が強く、想像力が人並み外れて豊かな子どもだったネズビットは、父親の幽霊を見たり、暗闇の中の物音に異常なほどの想像力を働かせて、死者や霊的な存在に対する恐怖を味わったと回想している。中でも子ども時代のネズビットを何年にもわたって苦しめた最も恐ろしい体験が、初めてフランスへ渡ったばかりの9歳の頃、ボルドーの地下埋葬所で見た200体ほどの天然のミイ

ラである。天窓から入る明るい光のもとに展示されている、ロンドンの大英博物館のミイラを見慣れていたネズビットは、懐かしい友達にでも会いに行くような楽しい気分で、姉達と一緒に納骨堂のミイラを見に行くが、そこで目にしたグロテスクな光景から受けた衝撃は、生涯ネズビットの脳裏から離れなかった。この件に関しても幼い Daisy は、その日の夕方あまりのショックからまだ完全に立ち直れずに、呆然としたまま宿泊場所へ帰ったにもかかわらず、母親にその恐怖感を打ち明けて共有してもらうことができなかった。母親は年上の娘達と一緒に正装して夕食に出かけてしまい、末っ子の Daisy はいつものように自分の部屋で、たった一人で食事をしなければならなかったのである。ネズビットはそれ以前にも、いろいろな物に対する恐怖感を克服するのに、母親でも家族でもない、全く血のつながっていない他者に何度か助けられたことに触れているが、この時も部屋に給仕に来た少年が Daisy の恐怖を受け止め、慰めてくれたのである。

その後も母親や姉達とフランス、ドイツ、スペインなどの国々を転々とし、小学生から中学生時代のほとんどを自分の「家」と呼べるところに落ち着くことなく、放浪の旅で過ごしたことが、ネズビットにとっては心の平静を得ることが出来ず、不本意だったことが次の引用から窺える。

The small material objects that surround one's daily life have always influenced me deeply. Even as a child I found that in a familiar *entourage* one could be contented, if not happy; but hotels and boarding-houses and lodgings have always bored me to extinction. ... I have a cat-like fondness for things I am accustomed to, ... (*The Girls Own Annual* 575)

その間 1868～70 年にかけて、10～12 歳頃のネズビットが学校へ行っていない期間に二人の兄とも一緒に過ごしたブルターニュ地方 La Haye の家での生活は、例外的に安定した幸せな時期で、ネズビットはそこを「私の子ども時代のもっとも懐かしい家」と呼び、“My School-Days” の中でも 2 回にわたって、その家のすばらしい果樹園や家畜小屋、隣接する農家の仕事の様子や、兄たちとの遊びについて書き、“The happy memories of that golden time crowd thickly upon me.” (*The Girls Own Annual* 711) と述べている。ここでは母親が子どもたちに好きなようにすることを許してくれたので、ネズビットは大人に干渉されることもなく、二人の兄とともに自由に田舎を駆け巡って思う存分遊んで過ごすことができたのである。

その後、ネズビットが 13 歳の頃、姉のメアリーが肺結核で亡くなったのを機に、ネズビット家の長期にわたる放浪生活に終止符が打たれ、翌 1872 年には母国へ戻ってケント州の田園地帯にある Halstead の屋敷に落ち着き、ようやく家族全員で安定した家庭生活が送れるようになる。“My School-Days” のシリーズも最終的にたどりついた、自然に恵まれ美しい花々が咲き乱れる Halstead Hall の広大な庭の描写や、兄たちと屋根裏部屋に本やおやつを持ち込んで楽しんだピクニックのエピソードで締めくくられている。

子ども時代と『魔よけ物語』

ネズビットの作品の一般的な特徴として、まず挙げられるのは「両親の不在」である。作中の父親や母親はすでに他界していることもあれば、生きてはいるがどこか遠い場所に長期滞在している場合もある。これに

は幼くして父親と死別するという悲しい出来事と、その後、まだ母親に甘えていたかった7歳の“Daisy”が寄宿学校へ送られ、最愛の母親から長期間離れて過ごさなければならなかったという家庭的な事情が関係していると思われる。また、ネズビットが悪い印象しか持っていない学校に関しては、作品の中で触れられることはほとんどない。主人公の子どもたちは、両親はもとより、両親の代わりに面倒を見てくれる周囲の大人たちからも束縛されず、兄弟姉妹だけの自由な世界を楽しむ。

『魔よけ物語』でも、Cyril、Anthea、Robert、Janeの両親は、どちらも所用で外国へ行っていて留守である。その間、子どもたちの世話をしているのは年老いた乳母だが、彼女はほとんど物語の中に登場せず、食事と必要最低限のアドバイスを与えるだけの存在である。また、この物語の時間は夏休みの始まりからスタートし、12月上旬まで続くが、その数か月の間、子どもたちが学校へ通っている形跡はなく、学校に関する記述は彼らが未来へタイム・トラベルした時に、エドワード朝の現実の学校とは比較にならないほど進歩した、理想的な学校の様子が提示されているだけである。4人の兄弟姉妹は自分たちだけの閉じた世界の中で、サミアドと魔除けのお守りを頼りに過去や未来への冒険を楽しむのである。ネズビットはいじめや恐怖心に苛まれた自らの小学生時代を生き直すかのように、また、長い放浪生活の中でもブルターニュ地方やケント州の「私の家」と呼べる場所で過ごした幸せな日々を追体験するかのように、物語の中で主人公の子どもたちに自由で楽しい子ども時代を満喫させている。

しかし、ネズビットの伝記や子ども時代の回想録から浮かび上がってくるキーワードは「死・恐怖」、そして「母親」である。Moore (72)によると、ネズビットが“My School-Days”の連載を脱稿したのが1897年8月で、同年10月には1899年に出版される *The Story of the Treasure*

Seekers を書き始めている。Knoepflmacher (149) はネズビットが “My School-Days” で劇的に蘇らせた幼少期のトラウマの中に、母親に見捨てられたのではないかという恐怖心が根付いていることを指摘し、それゆえに『砂の妖精』と『魔よけ物語』は “defensive structures against the very fear of abandonment defused through reminiscence in ‘My School-Days.’” (153) として読まれるべきであり、特に『魔よけ物語』は “a quest for the maternal” (156)、つまり母親探しを描いていると述べている。

『魔よけ物語』の中で子どもたちが過去や未来へタイム・トラベルする目的は、お守りの片割れを見つけて元の完全な形に戻すことで、彼らの「心からの望み」を成就することである。その望みとは戦争通信員として危険な戦地に赴いている父親と、病気療養中の母親と、彼女と一緒に連れて行っている赤ちゃんの弟が無事帰国して、ばらばらの家族が一つの完全なユニットになることである。『砂の妖精』や『火の鳥と魔法のじゅうたん』でも両親は留守であるが、その理由も期間もごく日常的な範囲内のもので、少なくとも弟も一緒に留守番をしていたので兄弟姉妹が離れ離れにはなっていなかった。しかし、『魔よけ物語』では事態がより深刻化し、弟からも引き離されることにより、「心からの望み」を叶えたいという子どもたちの思いはより切迫したものになっている。留守にしている三人のうち、子ども達がその不在を最も寂しがっているのは母親で、『魔よけ物語』の中には遠く離れた病気の母親を思って涙する場面がいくつかあるが、その逆に子どもの帰りを待ちわびる優しい母親や、母性愛にあふれる女性の登場人物も繰り返し登場する。主人公の子どもたちと同時代のロンドンで、貧民街に住む孤児 Imogen を、自分の亡くした子どもの代わりに引き取って、我が子として育てる古代イギリスの部族の女王や、ユートピア的な未来のロンドンで放校された

Wells 少年を家の戸口で優しく迎える母親、未来からタイム・スリップしてきた主人公の子どもたちを楽しくもてなしてくれるバビロンの女王、Jane を可愛がってくれるエジプトから嫁いできたばかりのバビロン王の 14 番目の妻や、門番の妻である。そして、何よりも魔除けのお守りが不思議な緑色の光とともに発する声は、“the sweetest and most terrible voice in the world” (287) であり、更に具体的に次のように表現されている。

... it was so sweet that you wanted to cry with pleasure just at the sound of it. It was like nightingales, and the sea, and the fiddle, and the voice of your mother when you have been a long time away, and she meets you at the door when you get home. (44)

これは紛れもなく元型的なグレート・マザーである。また、この物語の中で最も中心的な役割を果たす Anthea も、子どもながら母親のように振舞う場面が何度もある。彼女は出発前の母親から、自分の留守中に長女としてみんなを幸せにするようにと頼まれているので、その期待に添おうとして 4 人が仲良くやっていけるように仲裁役を務めたり機転を利かせたりするほか、彼らが両親の留守中に預けられている、年老いた乳母の家に下宿人として住み、古代エジプト研究に没頭している考古学者に、食事を摂るのを忘れないように促したり、もっと運動をするように声を掛けたりする。

このように、「母親」ないし「母性」がクローズアップされているのは、ネズビットの生い立ちを考えると、自分の母親にこうであってほしかったという願望が反映されているからに他ならない。ネズビットは

『砂の妖精』が出版された1902年に高齢の母を亡くしている。それによってネズビットの中で母親は“Though removed forever now, she also became, paradoxically, more accessible as an object of desire for her daughter’s imagination.” (Knoepflmacher 158) となる。確かに、それ以前に執筆された「バスタブル家」三部作における母親の不在は死亡による永遠の不在であったが、実母を亡くした後に書かれた「魔法」シリーズでは、生きている優しい母親の一次的不在として扱われ、ネズビットなりに母親との折り合いをつけようと試みてスタートするが、『砂の妖精』と『火の鳥と魔法のじゅうたん』では十分に追求できなかったことが、時間の経過とともに『魔よけ物語』の中でようやく実現されたとみることができる。

もう一つのキーワード「死・恐怖」も、子ども時代のDaisyに付き纏った暗い影として『魔よけ物語』の中で至る所にちりばめられている。まず、砂の妖精サミアドの一風変わった習性が「死」を連想させるものである。この魔法的存在は数種の動物から部分を取って一つにした不思議な生き物だが、サミアドにとって“sand is all I care about — it’s meat and drink to me, and coals and fire and wife and children.” (18) と言うほど何よりも良質の砂が好きで、最もリラックスできるのは砂を掘って、その中にすっぽり身体を覆い隠して眠ることである。この姿にDaisyの、死んでお墓に埋められた父親を重ねることができる。この他にも、バビロンの女王が現在のロンドンを訪問した時に巻き起こした、彼女の護衛兵たちによる証券取引所の人々の大量殺戮事件や、未来を訪れた主人公の子どもたちが受ける、今自分たちの世話をしてくれている年老いた乳母の訃報や、敵国の船に宝の在り処を知られないように、母国のために命を捧げる選択をして、船ごと険しい岩に突っ込むという自殺行為に及ぶフェニキア人の男たちなど、全編を通して他者の「死」が

扱われている。

「死」の影は主人公の子どもたちにも付き纏っている。彼らの過去への旅は、その時代や土地の珍しい風物に触れることができるばかりではなく、歴史上の有名人物たちにも会えるので、一見、観光旅行的なホリデイ気分満ちているが、表面下には常に子どもたち自身の命が危険に晒される可能性が同居している。彼らが最初に訪れた王朝時代以前の古代エジプトでは、部族同士の戦いに巻き込まれて身の危険を感じるし、考古学者を連れてタイム・スリップしたアトランティスでは、大津波がまさに彼らを島もろとも飲み込もうとした瞬間に間一髪で現在へ戻ってくる。これほどの恐ろしい思いをしても子どもたちが過去への旅を繰り返すのは、彼らの「心からの望み」を叶えたいという思いが強いからである。

また、ボルドーのミイラが幼い Daisyにとって初めての視覚的な人間の「死」との対面であったが、そのことが『魔よけ物語』では乳母の家の下宿人である、古代エジプト学者の部屋の様子に再現されている。彼の部屋の入口の壁には巨大なミイラのケースが立てかけてあるのだ。しかし、ネズビットは独特のユーモアのセンスで、そのミイラを “It is not at all the sort of thing that you expect to meet in a top-floor front in Bloomsbury, looking as though it would like to know what business you had there.” (36-37) とコミカルに表現しているので、実際の体験をかなり脚色していることがわかる。そして、ボルドーの納骨堂がそうであったように、『魔よけ物語』で繰り返し表れるのは、登場人物たちが暗く狭い空間に「閉じ込められる」という場面である。物語の冒頭からサミアドを含めた動物たちはロンドンのペット・ショップで狭苦しい檻の中に閉じ込められており、Cyril たちに救いを求めて訴えかける。その後、子どもたちが魔除けのお守りが作るアーチをくぐり抜けて訪れ

る、過去のさまざまな時代と場所において今度は彼ら自身が、その国の支配者たちに捕らえられて牢屋に閉じ込められる、という恐怖を何度も味わう。例えば、バビロンの王はユーフラテス河の川底にある、暗くてじめじめとした牢屋に子どもたちを監禁する。バビロンの女王も大英博物館の中庭で大騒動を起こした後で、館長に入口の門を閉められて外へ出る自由を奪われる。この「閉じ込められる」という感覚は、恐らくネズビットが子ども時代に教育を受けた多くの寄宿学校で、その環境に馴染めずに脱走を試みたこともあるように、まさに学校という牢獄に囚人の如く自由を奪われた状態で留め置かれている、と感じていたこととも関係があるのであろう。

『魔よけ物語』に見られる社会主義思想

次に、『魔よけ物語』の中で表明されている社会主義者としてのネズビットの社会批判と、目指すべき未来の理想像について考察する。ネズビットは21歳の時に実業家のヒューバート・ブランドと結婚し、彼との間に3人の子どもを産むが、その他に夫と住み込みの家政婦との間に生まれた2人の子どもも養子として引き取り、自分の子どもと分け隔てなく育てている。結婚して間もなくの頃、ブランドが病床に就いている間に、会社の共同出資者に資本金をそっくり横領されるという不運に見舞われた。そこで、ネズビットは一家を支えるために必要に迫られて、詩や物語を書いては新聞社や雑誌社へ持ち込むようになったのが執筆活動の始まりであるが、その後ブランドも政治に関する記事を執筆するようになり、ジャーナリストとして名を知られるようになる。ネズビットは社会規範や因習に囚われない、自由奔放な生活スタイルを楽しむ一方で、ブランドの影響もあって、女性の参政権には反対の立場を取るなど

非常に保守的な側面も持ち合わせていた。

ブランドもネズビットも 1884 年に結成された、社会主義の漸進的な実現を目指すフェビアン協会の創立メンバーである。そして、彼らが住んでいたエセックス州の Well Hall という屋敷はサロンの機能を果たしており、フェビアン協会のメンバーである中産階級の知識人や、キプリング、H. G. ウェルズといった作家、その他多くの芸術家たちのために open house として開放されていた。フェビアン協会はジョージ・バーナード・ショーやウェップ夫妻らを中心に、教育・賃金・衛生と安全などにおける最低限の国民的基準の達成と、産業の国有化による福祉国家への転換を目指しており、ネズビットはパンフレット委員会に所属して一般民衆を啓蒙するための出版物を執筆し、貧民街の人々にクリスマス・パーティーを企画するなど熱心に活動に取り組んだ。

ネズビットは既に『火の鳥と魔法のじゅうたん』（1904）で、当時の社会を批判する精神を所々で発揮しているが、『魔よけ物語』（1906）では、14 章中 4 章のエピソードの中に自分が特に関心を持っている、都市部の貧しい人々と劣悪な生活環境、社会の中の子どもや子どもの教育に関する自らの思想を非常に明確な形で盛り込んで、積極的に社会批判を展開している。

第 8 章で主人公の子どもたちに案内されてロンドン見物をしたバビロンの女王は、一国の支配者および奴隷の主人の立場から、現在のロンドンでは雇用者が果たすべき責任を果たしていないことを責め、そのために労働者階級の人々が貧しく惨めな境遇に置かれていることに憤慨して、“‘Why don’t their masters see that they’re better fed and better clothed?’”（149）と、子どもたちに問い詰め、更に“‘You’ll have a revolt of your slaves if you’re not careful,’”（150）と警告を発する。これを受けて、第 11 章では王朝時代のエジプトの民衆が主人の搾取に対

して反乱を起こしている騒ぎの真ただ中に、子どもたちはタイム・スリップする。ネズビットは食料と労働条件の改善を要求する反乱軍のリーダーに、次のような演説をさせている。

‘Comrades and fellow workers, how long are we to endure the tyranny of our masters, who live in idleness and luxury on the fruit of our toil? They only give us a bare subsistence wage, and they live on the fat of the land. We labour all our lives to keep them in wanton luxury. Let us make an end of it!’ (205)

彼らの暴動はファラオの騎馬兵たちによってあっけなく鎮圧されてしまうが、この場面で Cyril は、城壁の外側の貧しい人々は依然として掘立小屋に住み、前回彼らが王朝時代以前の古代エジプトを訪れた時と比較して、それほど居住環境が改善されていないことを目に留めている。

このような社会問題について、ネズビットは具体的な解決策を提示する代わりに、魔法によるユーモラスな問題解決を試みている。空腹を抱え、みすばらしい身なりをしたロンドンの労働者たちは、サミアドがバビロンの女王の願いを叶えることによって、それぞれの人の大好物の食べ物と飲み物が両手一杯分与えられ、彼らの服装はバビロンの宮廷風になる。一方、“‘Let’s present a petition to the King! He will listen to the voice of the oppressed!’” (206) と意気込んだものの、ファラオの宮殿へ行く前に反乱を制圧されてしまった古代エジプト人のために、ネズビットは子どもたちをファラオのもとへ連れてゆき、Anthea に民衆の声を代弁して彼らの要求を直訴させる。そして、子どもたちがマッチを擦って火を灯すという「魔法」を披露する交換条件として、ファラオに民衆の要求通り、より多くの食料の配給と休憩時間の延長を約束させる。

子どもに関するネズビットのメッセージが凝縮されているのは第10章と第12章である。Robertたち4人は、どちらの章においても一人ぼっちで泣きじゃくっている同年代の子どもに遭遇する。第10章に登場するのは両親を亡くし、ぶかぶかのみすぼらしい喪服を纏った少女 Imogen で、彼女は明日には貧民救済係がやってきて救貧院へ入られると言って泣いている。それを阻止するために、子どもたちが相談を持ちかけた学者の願いで、この少女を喜んで引き取ってくれるような家庭のあるところとして、サミアドが連れて行ったのが、紀元前55年のイギリスの森の中。なぜこの時代の、この場所に連れてこられたのか見当がつかずに質問する Anthea に、サミアドはイギリス社会の中で子どもが人間として大切に扱われていないことに対し、辛辣な社会批判を込めた返答をする。

‘You don’t suppose anyone would want a child like that in *your* times — in *your* towns?’ said the Psammead in irritated tones.
 ‘You’ve got your country into such a mess that there’s no room for half your children — and no one to want them.’ (186–87)

更に、『魔よけ物語』では語り手がたびたび物語の中へ一人称で介入してきて私見を述べるのが特徴的だが、この章でも古代ブリトン人の部族の女王と Imogen が、それぞれの中に自分が失った最愛の肉親のエッセンスを見出して、母と子として共に生活することになるというハッピー・エンディングを迎えた後、ネズビットは貧民や孤児を厄介者扱いする当時の風潮を批判し、子どもは本来どのような存在であるべきかについて、“a child was something to make a fuss about, not a bit of rubbish to be hustled about the streets and hidden away in the

Workhouse.” (191) と、意見を差し挟んでいる。

第 10 章まで、子どもたちは単に「お守りで遊ぶ」ことに専念するが、第 11 章を境に彼らは意識的に「お守りを利用する」方向へ転換し、タイム・トラベルする前に準備を整え、確実にお守りの片割れが見つかる場所へ行けるように戦略を立てるようになる。その一環として、今までは過去にしか行かなかったが、既にお守りの片割れが見つかった後の未来へ行けば、どうやってそれを手に入れたのかわかるのではないかという予測のもと、4 人は第 12 章で初めて未来のロンドンを訪れる。ここでネズビットはフェビアン協会のメンバーとして、イギリス社会のユートピア的な将来構想を提示すると同時に、この章で最も痛烈に当時の社会の病弊を告発し、社会改革の必要性を説いている。また、ここにはネズビットが尊敬する社会改革者 H. G. ウェルズに因んで命名されたウェルズ少年と彼の母親が登場し、子どもの教育のありかたについてもネズビットの進歩的な考えが示されている。

“An heir to Romantic conceptions of nature, art, imagination, and the child” (Moss 170) と評されるネズビットには、イギリスのパブリック・スクールで小学生を教えている教師たちに献呈した、子ども時代の教育に関する著作 *Wings and the Child, or, the Building of the Magic Cities* (1913) がある。その中でネズビットは大人と子どもの関係を次のように規定している。

There is a freemasonry between children, a spontaneous confidence and give-and-take which is and must be for ever impossible between children and grown-ups ... Between the child and the grown-up there is a great gulf fixed — and this gulf, the gulf between one generation and another, can never

be really bridged. (4)

そして、子どもを一人一人個性のある存在としてではなく、一つの集団として扱い、彼らの頭の中に事実のみを詰め込んで、想像力を枯渇させるような近代教育を強く非難する。

I would have every man and woman in whom the heart of childhood still lives, protest, ... with all the power of heart, against machine-made education — against the instruction which crams a child with facts and starves it of dreams, ... which crushes with heavy hand the wings of the soul, and presses the flower of imagination flat between the pages of a lexicon.” (8)

ネズビットにとって子どもの教育で最も重要視されなければならないのは想像力であり、この本の中の“Imagination”というタイトルの章で、その計り知れない価値について繰り返し述べている。

第12章で大英博物館の前に広がる、美しい庭園の、あまり人目につかない木陰で芝生に突っ伏して泣いているのは、紙くずを散らかしたからという理由で、大好きな学校から丸一日放校されてしまい、楽しみにしていた選択科目の授業を受けることができないのを悔しがっているウェルズ少年。主人公の子どもたちは、学校で自分の好きな科目を選択して勉強することができることや、学校へ行って授業を受けるのが楽しくて仕方がない子どもがいることに非常に驚く。ウェルズ少年に誘われて彼の家を訪問すると、更に大きなカルチャー・ショックが待ち受けている。少年の家は労働者階級に属するにもかかわらず、理解のある優しい

母親が息子の帰りを待っており、日当たりの良い子ども部屋は家の中心にあって、そこには子どもが怪我をしないように細心の配慮が行き届いているのである。そして、“Duties of Citizenship” (238) という科目について、少年の母親は次のように説明する。

... that course teaches you how to be a good citizen, what you must do and what you mayn't do, so as to do your full share of the work of making your town a beautiful and happy place for people to live in. (238)

ここから、なぜゴミを散らかした少年が放校されるのかという理由について、ネズビットは環境の美化にも関心があったことがうかがえる。

Anthea の思いつきでウェルズ少年の母親はエドワード朝のロンドンを垣間見るが、子どもたちが未来のロンドンへ到着した時に真っ先に気付いたのが、公園にいる人々の何も心配事のない穏やかな顔付きであったのと対照的に、彼女は現在のロンドンの人々の顔を“poor, tired, miserable, wicked faces!” (240) と形容して、目に涙を浮かべる。ネズビットはバビロンの女王とウェルズ少年の母親の2人を現在のロンドンに送り込むことで、そこが過去と未来双方からの訪問者の目にどのように映るかという反応を通して、いかに現状が嘆かわしく、多くの点で早期の改革を必要としているかを訴えているのである。第12章でネズビットは、子どもの教育に関する理想像のほかにも、育児に関する男女平等や階級構造の改革の必要性などにも触れている。

おわりに

本稿では作者 E. ネズビットの生い立ちと、フェビアン協会の社会主義者としての側面がどのように『魔よけ物語』の中に反映されているかを見てきた。上流中産階級家庭に生まれたからといって、彼女の子ども時代は決して手放しに幸福なものであったわけではなく、抜群の記憶力ゆえに喜びも苦しみも人一倍深く心の襞に留めてきたネズビットは、書こうと思えば苦しみをクローズアップした作品を書くこともできたはずである。また、社会主義者として、さまざまな社会悪を暴くというテーマを子どもの本の中に持ち込むことは、20 世紀初頭の他の児童文学作家たちには思いもよらぬことであったろうし、ネズビットでさえ、その扱い方によっては非常に重い内容になってしまう可能性もあった。しかし、ネズビットは『魔よけ物語』の中で、エブリデイ・マジックの手法とタイム・トラベルの要素を組み合わせ、それに独特のユーモアのセンスを加味することによって問題点を克服し、イギリス児童文学史における記念すべきタイム・ファンタジーの作品第 1 号を世に送り出したのである。

参考文献

- Briggs, Julia. *Edith Nesbit: A Woman of Passion*. 1987. Stroud: Tempus, 2007.
- Crouch, Marcus. *The Nesbit Tradition: The Children's Novel in England 1945-1970*. London: Ernest Benn, 1972.
- Eager, Edward. "Daily Magic." *The Horn Book Magazine* 34. 5 (1958). In *Children's Literature Review* 70. (2001):101-04.
- Eyre, Frank. *20th Century Children's Books*. London: Longmans, Green and Co., 1952.
- The Girls Own Annual* Vol. XVIII. No. 875 October 3, 1896 — No. 926 September 25, 1897.

- Jones, Diana Wynne. *The Ogre Downstairs*. 1974. London: Collins Voyager, 2003.
- Kipling, Rudyard. *Puck of Pook's Hill*, 1906. London: MacMillan, 1961.
- Knoepfelmacher, U. C. "Of Babylands and Babylons: E. Nesbit and the Reclamation of the Fairy Tale." *Tulsa Studies in Women's Literature* 6, 2 (1987). In *Children's Literature Review* 70. (2001): 147–162.
- Lewis, C. S. *Surprised by Joy: The Shape of My Early Life*. 1955. London: HarperCollins, 2002.
- Lively, Penelope. *The Ghost of Thomas Kempe*. 1973. Oxford: Heinemann Educational, 1975.
- Moore, Doris Langley. *E. Nesbit: A Biography*. Revised edition. London: Ernest Benn, 1967.
- Moss, Anita. "E. Nesbit's Romantic Child in Modern Dress." *Romanticism and Children's Literature in Nineteenth-Century England*. Ed. James Holt McGavran Jr. 1991. In *Children's Literature Review* 70. (2001): 169–180.
- Nesbit, E. *Five Children and It*. 1902. London: Penguin Books, 2004.
- . *Harding's Luck*. London: Hodder and Stoughton, 1909.
- . *The House of Arden*. 1908. La Vergne: Digireads, 2010.
- . "My School-Days." Parts I — XII. *The Girl's Own Paper* 18, 1896–1897.
- . *The Phoenix and the Carpet*. 1904. Hertfordshire: Wordsworth Editions, 1993.
- . *The Story of the Amulet*. 1906. London: Puffin Books, 1996.
- . *The Story of the Treasure Seekers*. 1899. Harmondsworth: Penguin Books, 1994.
- . *Wings and the Child, or, the Building of Magic Cities*. London: Hodder and Stoughton, 1913.
- Norton, Mary. *The Borrowers*. 1952. San Diego: Harcourt Brace, 1981.
- Smith, Barbara. "The Expressions of Social Values in the Writing of E. Nesbit." *Children's Literature* 3 (1974). In *Children's Literature Review* 70. (2001): 109–116
- Travers, P. L. *Mary Poppins*. 1934. Tokyo: Kodansha, 1992.
- Wells, H. G. *The Time Machine*. 1895. London: Penguin Classics, 2005.

E. Nesbit's Childhood and her later Socialist Ideology as Reflected in *The Story of the Amulet*

Yasuko Shirasu

In the history of British children's literature, the root of the "time fantasy" stories can be traced back to the year 1906 when E. Nesbit published *The Story of the Amulet*. In this story the author's childhood experiences as well as her later socialist ideology as a founding member of the Fabian Society are clearly expressed. Based on the research into her biographies and the autobiographical articles serialised in *The Girls Own Paper*, the key words of Nesbit's formative years were identified as "death," "fear" and "mother." These elements are reflected in the nature and the choice of characters in the story, or in the fearful incidents the child protagonists encounter on their repeated time travels. By sending children both to the past and the future, Nesbit creates the situations which illuminate various social problems facing Britain at the beginning of the twentieth century, and she makes some critical comments on them. Her main concerns include poverty, children's status and their education. Despite the fact that this work deals with serious themes, it is fundamentally comical because of the successful combination of "everyday magic," time travel and the author's unique sense of humour.